

寄書

でたらめ

和歌山 晩 雨

今日課業を終へて舎に歸れば自習室の机の上に一冊の書物、それは曾て注文しておいた太平洋畫會畫集、早速拜見すると出て來たのが大下先生の肖像、次は鹿子木先生例の二枚の出齒は判然明瞭であつた。次のは満谷先生これは頗る奇抜に出來て居る、頭ハゲタ恰好は何ともいへぬ。丸山先生の肖像はやツぱりどうしても小説のモデルにでもなりさうである。あんな顔をなされて居ても、繪具を塗つた布で顔の汗をふかれるのか知らん。昔、吉田先生と查公を罵倒した面影は見うけぬ様だ。十三頁には石井先生の例の屏風畫の様なもの。繪ばかり見て居て氣が付かなかつたが、其上には會員諸先生の住所姓名が背比べをし居る。一番長いのが中學世界で御なじみの三土先生の住所。十九字ある

これから集中の畫は〇〇する(〇〇の中に入れてる様な適當な言語を得ない)

一番すきなのが柏亭先生の房州南端。其次が明石先生の四月。一番よいと思ふのが鹿子木先生の老人、其次が中川先生の嚴寒の後、房州南端が何故すきか？ 自分は海の景色が一番すきだ。而もあの位置が一寸見た時から自分の膽玉を奪つた。寫眞版だから、どんな色をして居か分らぬ取材や位置は何とも自分の口ではいへない位すきだ。四月は何故すきか？ こんな景色はいくらでもある様に思はれる。平凡な景色である。併し扱て三脚さげて探す段になると中々見つかからない。あのスキの上には強い感が現はれて居るのだらうと思ふ。こんな景色を畫きたい描きたいと思ふ、それですきだ。

理由が薄弱だといはれても仕方ない。昨日圖書館で梅澤先生の繪畫鑑賞法を借りやうと思ふたら只今出て居りますとの事とうとう讀めなかつたのだから。

老人は何故よいか？ よいからよいのだ。嚴寒の後もよいからよいのだといふより知らぬ。

大下先生の猪苗代湖は印刷が悪かつた爲雨

の景色の様だ、(ひよつとしたら雨景かも知らぬ)何か石版で一度見た様な畫である。丸山先生の林投樹。色が單調だとふ評はあつたが寫眞版では分らぬ、確かに先生式の繪である口繪の御顔とは連想出來ぬ繪である。中央の木の葉、幹等の間に白く殘つて居るのが目にさわる。先生の繪は大低右の方にかゝる前景があつて一望千里といふ様な大きな畫である。

三上先生の河沿ひ。昨日自分はこの四手網の舟を油繪でなすつて見た。それが爲非常に刺戟を強くした。地平線を高くつた他は平凡を免れぬ。

永地先生の椿。右肩非常に廣い様に思ふ。これは思ふだけで、責任のなまものとす。高村先生の水鏡。畫題の付け方を何とか尙一層奇抜なものにしてほしい。

それから淺井先生である。自分は二年前先生に會つた。聖護院通の御宅を御訪ひ申した事があつた。早速會つて下さつた。而も自分は二日つづけて御話を承りに參つた。

それから岡崎の關西美術院で先生や鹿子木先生の繪を拜見した。初めて御會ひ申した

のが最後に御會ひ申したのであつた。「卒業してからゆつくりやつて來給へ」といつて下つた御言葉はもう御聞き申す事が出來ないのである。集中藏められた先生の遺作を見て自分はそゞろ回舊の念に打たれたのである。關西を風靡せられた洒々なる筆はすぐ轉じて谷口蕪村を想ふのである。

而して先生の所謂琵琶のバチ然たる鼻が目の前に髣髴とするのである。

先生の家の客間にかけてあつた影の青い額から鼻へかけ明るく光つて居る先生の肖像畫（和田英作先生が巴里在留中の筆とかや）がチラチラするのである。

先生の遺作河畔。向岸の家及び左方の森等は先生の肉筆に接する様である。

滿谷先生の野邊。これも非常にすきてある。大阪で先生の肉筆を見たが其畫が顔の前へ出て來る様である。

森田先生の山頂の夏。之も見た時如何なる現象にや去年拜見した大下先生の赤城山の畫が頭に淨んだそれはこれと反對に山が暗くて水面が明るく反射して居たと思ふ。世間で八ヶ間しい石川先生の金魚の障子の

反射も拜見した。

これ偏へに此の一小冊子の御蔭である。其代り自分などに、がらにもない事をいはずるのもこの一小冊子の罪である。終。

▲研究所六月例會の寫眞、起立せる分、右の方長髯の老人は鈴木眞氏にして、當年七十二歳にして孜々として水彩畫を學べる稀代の翁なり。柱を隔て、起てるは松山忠三氏、盛んな體度で正面に向いてゐるのが水野以文氏、一つ隔て、一番奥に居る洋服姿は丸山講師、其隣の洋服は河合講師、少しく隔て、起てるは大下講師、稍低く髯ある人は望月講師、其隣りは相田寅彦氏、左の隅は佐藤量氏にして、相田氏佐藤氏はレンズの中心を外れて顔が横長くなりたり。坐せる人にて、右の極隅頭だけ見ゆるは高橋松治氏、其前に大きく寫れるは鈴木一治氏、老人の下で正面を向ひて白衣を着けしは夏目七策氏、其前の井の字ガスリの大形の着物の主は岡田武彦氏、其後ろの柱に頭をつけたるは赤城泰舒氏、中央に坐せる肩揚の人の後ろ、右の方へ顔の三分一を出せしは

大磯で海鳥を捕へし太田福造氏、同じく左の方に小さく半顔を示せるは鈴木錠吉氏にして、なほ左の方には讀者諸君御馴染の人も數人ありしがレンズに入らざりしは遺憾なりし。

△ △ △

畫囊やら傘杖やら三脚やら持つたり背負たりして田舎へゆくと、よく、犬に吠へられる、これも一の寫生難に數へることが出来る、六月の農業世界には吠へて噛みつく犬と噛みつかぬ犬との鑑別法が出てゐる『吠へる犬に出逢つて第一に見るべきは其尾であつて、如何に吠へても尾を揮つてゐるものは恐ろしく足らない、犬は噛みつく時には決して尾を振らない』と

日本水彩畫會新會友

東京府下豊多摩郡澁谷村上澁谷六十二

黑瀬盛久